

《書評》

青葉 高著 『野菜—在来品種の系譜—』

矢澤 進*

1

青葉氏は、昭和24年大阪府から山形県鶴岡市に転勤し、庄内地方に色濃く残された在来農法に接して強い衝撃を受けたという。とくに、昭和の時代に、温海（あつみ）カブのような園芸作物が、焼畑農法で栽培されている事実に着者は強くひかれた。この驚きが原動力となって、30数年間に及ぶ、在来野菜に対する著者の熱情の結晶化したものが本書である。

著者は、数年前に出版した『北国の野菜風土誌』（東北出版企画）のなかで、東日本における野菜の在来品種の調査結果をもとに、その特性や栽培法、来歴および利用法などを紹介している。本書、ものと人間の文化史シリーズ第43巻『野菜—在来品種の系譜』は、いわばその全国版である。

蔬菜園芸学の泰斗、熊沢三郎氏は、その著書『総合・蔬菜園芸各論』の序文に、「畑という舞台の上で、農家は年々歳々、作物と、とっ組合って栽培を演出している」と述べているが、まさに在来野菜の多くの品種は、このような農家の努力のうちに永く残されてきた、文化財的存在であるといえよう。本書では、このような立場から野菜をとらえようとする著者の執念がいたるところに認められ、とくに、第2部のカブヤツケナの項は、著者の永年にわたる仕事の重みを感じさせて、圧巻である。

2

本書は、2部からなっている。第1部「野菜品種の生いたち」では、品種成

* やざわ すすむ、京都府立大学農学部

立についての基本的な問題点が要領よくまとめられており、第2部の内容を、読者がより深く理解できるようにとの配慮がなされている。内容は、たんなる解説にとどまらず、まず第1章においては、北国で利用される山菜をとりあげながら、食品としての野菜を考察している。第2章では、野生植物と作物の違いを、第3章では、著者が永年とり組んできた球根形成の問題にも触れながら、タネとタネイモの形成を繁殖の立場から論じている。第4章「品種の成立」では、品種改良の具体的な方法をも加えながら、品種成立の過程が述べられている。

第2部「在来品種の特性と伝播経路」は、本書の中核をなすものである。第5章では、まず、著者が永年手がけてきたカブの在来品種から筆をおこしている。カブは、わが国においてもっとも古い野菜の一つであるとともに、現在においても需要の多い重要な野菜であることから、多数の品種が各地に残されている。著者は、庄内の焼畑でみられる温海カブの歴史を明かすことは、たんにカブの一品種の栽培上の問題にとどまらず、わが国の畑作文化の起源にもたちいたる大きな問題であるとしている。評者は、スリランカの焼畑に、カブの仲間がしばしば栽培されていることを、最近の調査で認めている。スリランカおよび東北地方の焼畑でともにカブの仲間が栽培されていることは、たんなる偶然であろうか、興味ある問題である。さらに、著者は畑作文化の起源へのアプローチをも含め、全国的な規模での在来カブ品種の調査を行なっている。各地の在来カブの品種特性を詳細に記載しているが、これらの記載事項の多くは、著者が山形で栽培し、自らの眼で確かめたものであり、この調査に実に15年の年月を費したという。現在絶滅に瀕している品種の記載もあり貴重なものである。調査されたカブのなかには、先の温海カブと同様、焼畑でつくられている数種のカブも認められ、その栽培の歴史も稲作以前か以後かといわれるほど古いものであるらしい。『稲作以前』の著者、佐々木高明氏は、カブを焼畑における菜園型作物（商品作物）としてとらえている。これに対し、著者は、焼畑でのカブの菜園型作物としての利用は、比較的近年の傾向で、本来の焼畑でのカブやダイコンは準主食的に用いられる重要な作物として栽培されたものであ

るとしている。

つぎに各地のカブの品種について、草姿、葉形および種皮の特性（種子を水に浸したとき、表皮細胞が水胞状になる品種と、水に浸しても水胞状にならない品種がある）などの調査から、わが国におけるカブの在来品種を和種系カブと洋種系カブに分け、これらの地理的分布の体系をほぼ完成させている。これによれば、西日本には主として和種系品種群が、東日本には洋種系品種群が分布している。両品種群の分布域の境界は、ほぼ中部地方と近畿地方との境界線あたりであるとしている。中尾佐助氏は、これをカブララインと名づけ、作物を外国から受けとったときの異なった経緯を示す境界線とした。この境界線は、これまで多くの人が指摘した人文的、社会的境界線とよく一致するものである。焼畑カブの栽培地域も、ほぼこのラインと似たようなものとなる。このラインより東部では焼畑でカブを栽培するが、西部ではカブにかわりイモ類が焼畑に現われてくる。

第6章では、カブと分類上同じ種 (species) に属するツケナ* について、カブと同じ調査方法で、わが国における品種の地理的分布を調べている。その結果、ツケナの場合もカブと同様、西日本には主として和種系品種が、東日本には洋種系品種が分布していることを明らかにし、両者の分布境界線はカブララインとほぼ一致するとしている。

わが国の洋種系品種に類似したカブやツケナは、中国をはじめ諸外国にも栽培されているが、和種系品種に類似したものは、わが国以外では見出すことができない。著者は、カブやツケナの和種系品種は、おそらく西日本で生まれた京菜群が基本となって成立したと推定している。京菜群は、京菜(水菜)、壬生菜に代表される非常に分枝性の強いツケナである。和種系のカブやツケナの基本種をこの京菜群であるとするには、評者は多少疑問をもつものである。現在に残る和種系カブは、ほとんど分枝性のないものであり、分枝性の強い京

* ツケナと呼ばれる野菜は、単一の種 (species) に属するものでなく、 $n=10$ のグループ (*Brassica campestris*) を中心とし、一部 $n=18$ のカラシナ (*B. juncea*)、 $n=19$ の洋種ナタネ (*B. napus*) からなっている。カブは $n=10$ で、*B. campestris* に属している。

菜群とどのように結びつくのか、その移行型について詳細に考察がなされていないために、やや説得力に欠けるように思われる。さらに、著者は、京菜群は、他のツケナ群とは交雑が難かしいと述べているが、評者の経験では決してそのようなことはなく、京菜群を、この点をもってツケナ類のなかで特別な群とすることには問題があろう。また、著者は京菜群の起源を高知県の潮江菜やオソカブ菜に求めている。たしかにこれらの品種の草姿は、京菜群に類似し、種皮型も同じであるが、これらをもって潮江菜やオソカブ菜を京菜群の起源とすることについては納得できないところがある。評者が、このような点に固執するのは、和種系のカブおよびツケナのルーツを明らかにすることは、上代以前のわが国への野菜の伝播経路を考察するうえに大へん重要な位置をもつものと考えられるからである。

著者はルタバガの一種であるセンダイカブについても詳細な調査を行なっている。センダイカブはアイヌ語で、‘アタネ’と呼ばれ、アイヌの栽培野菜として古来唯一のものであるとされている。このセンダイカブは、これまでほとんど解明されていないアイヌの農耕文化との接点をなすものでもあり、著者が指摘するように大へん興味ある在来野菜である。

わが国を代表する野菜の一つであるダイコンについて、各地の代表的な品種をとり上げ、その品種特性を述べている。耕土の深い関東地方には、根の長いダイコンが、耕土の浅い関西や中京地域には根の短い品種や丸大根が栽培されている。品種的には、わが国では南支（華南）系ダイコンが広く栽培されているが、北支（華北）系雑種群が、長野、岐阜県以北の地域と山陰および京都附近に多く残されている。この両品種群の分布域の境界はそれほど明確ではないが、中尾氏がいうカブララインとオオムギラインとを折衷した線になるという。カブ、ツケナの場合もそうであったように、ダイコンの場合も北と南で栽培品種が異なることを明らかにしている。

以上の調査結果をふまえて、著者はわが国における農耕文化の流れは、大きく分けて北からのものと、南からのものがあると推察している。著者はキュウリ、マクワウリ、ネギなどについても調査を行ない、北および南からの農耕

文化の流れの存在をさらに確かなものとしている。

ナスは、わが国では正倉院文書に記録がある古い野菜である。北陸地方などの冷涼地には早生品種が、暖地には晩生品種が分布し、果実の形については地方色が見られる。しかし、日本を二分するような明瞭な品種分布の境界線は認められていない。

3

第7章では、品種伝播のしかたと野菜品種の分布について、在来品種を中心に論を進め、第8章はわが国への野菜の渡来経路について、第9章では在来品種と在来農法の保存について言及している。とくに第7、8章では、わが国への野菜の伝播経路とアジア各地の農耕文化との関連が述べられ興味深い。

著者は、わが国における野菜の在来品種の地理的な分布調査の結果から、つぎのような4つの分布型を提唱している。

第一は、ナスに代表されるもので、品種分布に明瞭な地域性の認められないものである。ナス型分布を示す野菜には、マクワウリ、ユウガオなどがあり、熱帯産の野菜が多く、わが国では夏期に主として栽培されるものである。イネも、この型に類似した分布型を示している。第二は、ダイコンやキュウリに代表される。それぞれの品種が、中国で華南系と華北系とに分化し、日本へは分化後渡来している。この分布型では、華北系の品種は北陸地方から東北地方に、華南系の品種は、主として関東地方以西に分布している。ネギも、この分布型に属する。第三は、カブやツケナによって代表される分布型である。これは主として、西日本には和種系品種が、東日本には洋種系品種が分布している。第四の分布型は、シベリア・キュウリ、ルタバガに代表される。この分布型に属する野菜は、主として、山形県、宮城県以北の東北北部と北海道で栽培されている。著者の提唱したこれらの分布型は、野菜以外の作物にもあてはまるとされ、わが国における畑作文化の推移を理解するうえで非常に高く評価されるべきものである。さらに著者は外国から日本への野菜の伝播経路についての考察をも加えているが、この点については調査報告例が少なく、多少具体性に欠けたもの

となっている。もちろん、これは本書の目的から ややはずれるためでもあろう。野菜のわが国への伝播経路を明らかにしてゆくことは、わが国の農耕文化の流れを知るうえにおいて、重要な課題の一つであると思われる。

4

野菜の在来品種は、その多様性のゆえに地方色豊かなものとなっている。現在は多様性の要求される時代でもあり、在来品種のもつ特性がさらに見直されるべき時でもあろう。しかし、これらのなかには絶滅の危機に瀕しているものも少なからずあり、それらの保存の必要性を著者は強く訴えている。評者もまた同感である。

在来品種のなかには、焼畑カブのように古い農耕技術とともに歩み続けてきた品種もあり、これらの品種の来歴を明らかにすることは、農耕文化の発展の推移を明らかにするうえでも大へん重要なものとなろう。最後にこれらの諸点をも考慮に入れた立場での、野菜の在来品種についての著者の今後の研究成果をさらに期待するものである。

〈法政大学出版局, 1981年, 1,300円〉